
ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

D a i s y W i g

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～
リアツンデレ化計画

【Nコード】

N1857C

【作者名】

Daisy Wig

【あらすじ】

ハヤテ第2弾！マリアをナギの様なツンデレにしたらどうなる！
？

Episode 1

都内のある場所に、何処からどう見ても皇居にしか見えないお屋敷がある。それは、主人の三千院 ナギと執事の綾崎 ハヤテ、執事長のクラウドス、メイドのマリアが住んでいる豪邸である。

その豪邸内に、ハヤテを呼ぶナギの声が響く。

「ハヤテー！」

自室にいたハヤテは、その声を聞き、急いでナギの部屋へ向かった。

「お嬢様、何か御用でしょうか？」

「ハヤテ、マリアを見なかったか？」

「マリアさんですか？ そう言えば、今日は一回も顔を見てませんね」

「そうか、見てないか・・・」

ナギは詰まらなさそうな顔で言った。

その頃、マリアはと言うと、都内の本屋さんで立ち読みをしていた。本のタイトルは、『ツンデレの歩き方』である。

何故にマリアがこの本を読んでいるのかと言うと、以前にオタクに襲われた時に助けてくれた少年に恋をしてしまったからである。

某日、某時刻、マリアは公園に来ていた。

(少し早く来すぎてしまったかしら?)

と、腕時計を気にするマリア。するとそこへ、ハヤタがやって来た。

「こんにちは、マリアさん。大事な話しつて何です？」

ハヤタがそう聞くと、マリアは頬を赤く染め上げてこう言った。

「あ、あの、ハヤタさんは今、その、付き合っている方はいらっしやるのですか？」

「いないよ」

「そ、そうですね」

「で？」

「はい？」

「話してそれだけ？」

「いえ、実はですね、その、私……」

マリアの頬は更に赤みを増した。

「私、ハヤタさんが好きなんです！付き合ってください！」

言ってしまった。マリアはついに告白をしてしまった。しかし、

ハヤタはこう言った。

「ゴメン、僕はツンデレが好きなんだ。だから、ツンデレ以外の女性とは付き合えない」

マリアはこの時、ナギの様なツンデレになる事を決心したと言う。

（ハヤタさん、私あなたの理想の女性になってみせます！）

本屋の自動ドアが開くと、マリアが出て来た。背後では店員が、ありがとうございますと会釈をしている。

「あれ、マリアさんじゃないですか」

その言葉と共に、本屋から少年が出て来た。

（この声、ハヤタさんの声……。ふふふ、これはチャンスよ。生まれ変わった私を見せて心をゲットしてみせますわ！）

「こんな所で一体何をしてたんです？メイドの仕事サボって」

「別に、ハヤタには関係無いでしょ」

マリアは様子を窺った。

「それもそうですね。では」

そう言ってハヤタは去って行った。

（あら、気付いてませんね）

それから暫くして、マリアは家路に着いた。

Episode 1 (後書き)

1話完結のオムニバスにしようとも思ったが、連載式にしてみるのも悪くないかもと思い、連載式にしてみました。そして今回もバトルあります。

「ハヤタ、虎のタマと対峙して殺される」

マ：「やりませんそんな事！」

マリアさん、何時の間にか？

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

Episode 2 (前書き)

前回の、ハヤテのごとく!は・・・。

「ゴメン、僕はツンデレが好きなんだ。だから、ツンデレ以外の女性とは付き合えない」

そう言われ、マリアはツンデレになる事を決心。

って、事で本編スタート!

ハヤテのごとく! ~作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画~

Episode 2

マリアは三千院家のお屋敷の玄関ドアを開けた。その先には、ナギが腕組みをして立っていた。

「マリア、今まで何処に行ってたんだ？今何時だと思っている？もう7時だぞ！」

「ごめんなさいナギ、黙って出て行ってしまっただけ」

「まあ良い、早く夕飯を作るのだ」

その時、マリアは夕飯の材料を買っていない事に気付いて、急にオドオドした。

(どうしよう？夕飯の材料を買うの忘れていましたわ)

「どうしたんだ？マリア」

ナギの問いに、マリアは更に慌てた。

「ゆ、夕飯の材料、買うの忘れてましたわ。今買って来ますので、ちょっとお待ちになって下さい」

そう行つて、ドアを開けようとした時、ハヤテがドアを開けて入つて来た。

「あ、マリアさん、帰ってたんですか。晩ご飯の材料、買って来ましたよ」

ハヤテはそう言つて、持っていた買い物袋を示した。マリアはホツとして、胸を撫で下ろした。

「所でマリアさん、今まで何処に行ってたんです？」

「そうだぞマリア、心配したではないか」

「あなた達二人には関係無いわよ。それとハヤテ、晩ご飯の用意お願い」

マリアそう言つて自室へと向かった。同時に、ハヤテとナギの顔に黒い影が覆い被さった。

「マリアさんって、あんなにツンツンしてましたっけ？しかも呼び捨て・・・」

ハヤテの問いにナギは、さあと答える。

自室に戻ったマリアは、徐おもむきにメイド服を脱ぎ、タンスの扉を開けた。中には庶民が着る様な普通の洋服が入っている。

マリアはそれを取り出し、上下とも着用。そしてつり目、最後に髪型をツインテールにした。如何にも、自分がツンデレである事を醸し出している様な雰囲気だ。

それから暫くして、ハヤテがやって来た。

「マリアさん、お食事の用意が出来・・・ま・・・!?」

ハヤテはマリアの容姿を見て驚いた。何故なら、それは見た事も無い姿のマリアだからである。

「あの、どちら様で?」

「どうしたんだハヤテ、見て判らない? 私だ、マリアだ」

ハヤテがその言葉を理解するまで、数秒は掛かった。

「えーっ!?!」

ハヤテのその叫び声に、ナギが慌ててやって来た。

「ハヤテ、どうしたんだ!?!」

「お、お嬢様、マリアさんが・・・マリアさんが!」

ナギはマリアの部屋を覗いた。

「ま、マリア、どうしたのだその格好!?!」

ナギが言うと、マリアは頬を赤らめ、事のあらましを説明した。

「成る程、マリアに好きな人が出来て、その好きな人に告白したら、その人に”ツンデレ以外の人とは付き合えない”と断られたから、それでツンデレになろうとしているのだな?」

ナギは腕を組んで確認するかのように訊ねた。

マリアは首を縦に振った。

「ふっ、マリアにツンデレは無理だ、諦める」

ナギがそう言うと、マリアは紫色の禍々(まがまが)しいオーラを放った。そして次の瞬間、ドカーンツと大きな爆発音がしたかと

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

思うと、ナギは腹這い倒れてピクピクと痙攣を起こしていた。

「ちよっと外の空気吸って来ます」

マリアはそう言って去って行った。

Episode 3

「マリアが公園のベンチに座ってシクシクと泣いていると、ハヤタがやって来た。」

「そこのお嬢さん、どうして泣いているんです?」

「マリアはその声に、顔をあげた。」

「ハヤタ!」

「マリアは直ぐ様泣き止み、ハヤタに抱き付いた。」

「ち、ちよつと待って。何で僕の名前を知ってるんです、て言うかあなた誰ですか?」

「その問いに、マリアは頬を赤くし、数歩ハヤタから離れた。」

「私はマリアだ」

「マリアさん?」

「マリアは頷いた。」

「アツハハハ、マリアさんがそんな格好してる訳無いですよ。それに、彼女は僕の事を呼び捨てにした事は無いですから」

「と、ハヤタは笑い泣きで溢れた涙を拭きながら言った。すると、」

「マリアは紫色の禍々しいオーラを放った。」

「やばっ、怒らした!? て言うか、怒ってるって言う事は、本当にマリアさん?」

「その問いに、マリアの禍々しいオーラが消えた。」

「そうよ」

「えっ・・・?けど、何でまたそんな格好なんです?」

「あんたが言ったんじゃない、ツンデレが好きだって」

「それじゃあその格好、僕の為に?」

「べ、別にあんたの為にツンデレになっただんじゃ無いんだからね!」
と、横を向いて口を尖らすマリア。

「ハヤタは頬を赤く染め上げ、心臓をバクバク高鳴らせた。」

（か、可愛い）

ハヤタはそう思った。マリアを欲しいとも思った。他の誰にも渡したく無いとも思った。

(ハヤタさんの心、射止められたかしら?)

マリアはそう思った。

「マリアさん……」

その時、物陰から二人の男が現れた。この間ハヤタが撃退したメイド狩りだ。

「そのツンデレ美少女は僕達のものだつ、誰にも渡さない!」

と、眼鏡を掛けた細身の男がマリアの前に立って言い、続いて眼鏡を掛けたデブの織田倉が、そうだそうだと云った。

「君達、この間のメイド狩り……」

しかし、二人はそんなのを耳にせず、マリアに声を掛けていた。

「お嬢さん、お名前は?」

二人の声がハモった。

「おい」

ハヤタは言った。

「何だよ、ナンパの邪魔すんなよ」

デブの織田倉は振り向き様にそう言つと、マリアの方に向き直つた。

ブチッ! その時、ハヤタの堪忍袋の緒が切れた。

「デブ、こっち向け」

織田倉はその言葉にムツとして、

「デブ言うな!」

と、振り向いて怒鳴り付けた。その瞬間、ハヤタの拳が織田倉の顔面にめり込み、彼は気を失って倒れた。

「あつ、織田倉!」

細身の男はそう言つて彼を一旦見ると、ハヤタを睨み付けた。

「よくも織田倉を!」

怒った男は、ハヤタに飛び蹴りを放った。

うわっ! ハヤタは宙を舞い、墜落してはコロコロと転がってピ

クリとも動かなくなつた。

「ハヤタさん！」

マリアが叫び、駆け寄ろうとすると、細身の男がマリアを捕まえた。

「あんな男といるより僕達といる方が何倍も楽しいよ、きっと」

マリアは困り果てた。

「それに、彼はもう動けない」

そう言つて、男はマリアをお姫様抱っこした、と言つか仕掛けた。

「何勘違いしているんだ、まだ俺の体は動くぜ！」

ひよ？ 男は吃驚して喉を鳴らした。

「覚悟しろよ、このオタク野郎！」

ハヤタはそう言つて、男の前に瞬間移動、と言つか目にも留まらぬ速度で接近し、男に飛び蹴りを放つた。

おぶっ！ 男はマリアを手放して吹っ飛んだ。

「くっ、何者だ貴様！？」

「俺は朝月 隼太、これからお前を潰す男だ。よく覚えておくんだな」

「成る程、これはツンデレ好きの僕への試練つて訳か。だったら本気で行くまで！（何か誤解している）」

男はそう言つて、椅子の後ろにある鉄の柵からパイプを一本もぎ取り、装備した。

「おいおい、武器を使うのは卑怯じゃねえか？」

しかし、男は無視。パイプを頭上に構えて一気に振り降ろした。

シューインッ！ ハヤタは目にも留まらぬ速度でそれをかわした。

「喰らえっ、必殺かめ め波！」

ハヤタは軽く飛び上がり、男に向かつて光線を放つた。

「なっ、お前孫 空か！？てかそんな技・・・」

男は言い終わる前に、ハヤタの光線を喰らってしまった。

光線はドーンッと轟音を立て、クレーターを作り上げ、男を真っ黒焦げにした。

ハヤタはコトンと着地すると、

「家まで送りますよ」

そう言っつて、マリアの方を向いた。その直後、体勢を立て直した男が跳び蹴りを放った。

「隙あり！」

ハヤタは慌てて向き直った、が、時既に遅し。ハヤタは顔面にキックを喰らっていた。

「うわあっ！」

ハヤタは吹っ飛び、地面を転がった。

「てめえ、まだ動けたのか・・・」

「あんな光線で僕を倒そうなんて思わない事だよ」

「タフな野郎だぜ」

ハヤタはそう言っつと、すっくと立ち上がり、身構えた。

「なら、本気を出すしか無いみたいだな」

ハヤタは、はあーっと気を溜めると、全身に金色のオーラを出現させた。

「これを使うのは、貴様で二人目だ」

そう言っつと、ハヤタの髪の色が黒から金色へ、瞳が緑色に変色した。

「だあっ！」

その瞬間、ハヤタの回りに波動が生まれ、男は吹っ飛んだ。

「一瞬で決める！」

そう言っつて、ハヤタは宙を舞う男の上に高速移動すると、両手を組んで叩き付けた。

「ドメだ！　ハヤタは超かめ　め波を放った。

男は悲鳴をあげながら、光線に飲み込まれ、大爆発を起こした。

ハヤタは着地し、髪の色、瞳の色を元に戻した。

「さ、用事も済んだし、家帰りますよ」

と、ハヤタはニッコリ笑顔でマリアを見つめた。

「所で、さっきの方は・・・？」

マリアは跡形も無く消えた男を心配した様子で訊ねた。
「あそこ」

ハヤタは公園の入り口を指差した。その先には、全身真っ黒に染まった男が、織田倉を抱えながら慌てて走り去って行くのが見えた。
（ハヤタさんが殺人犯にならなくて良かったですわ）

マリアはホツとして胸を撫でた。

「あ、ありがとな、私の為に・・・」

「いや、当然の事をしただけですよ。それよりマリアさん、メイドの仕事はどうするんです？」

「えっ？」

「ツンデレじゃ、メイドは務まらないと思います」

「良いのだ、それにもう、クラウスに辞表を出して来た。これからツンデレを目指す」

「ふうん」

ハヤタは鼻を鳴らした。

「な、何だその、僕の為にツンデレになったのか？、とでも言いたげな目は？さっきも言ったが、別にハヤタの為にツンデレになった訳じゃないぞ」

マリアはそう言っつて、頬を赤く染めて横を向いてしまった。

「それは良いけど、メイドの仕事辞めたら、住むところどうするんです？マリアさん、住み込みで仕事してたんですよね？」

「そ、それはっ、別にあんたには関係無いだろ！？」

（住む所無いから居候させてくれなんてとてもじゃないけど言えませんわ）

「マリアさん、もし住む所無ければ、僕の部屋にでも来ます？」

「ほ、本当か、本当に良いのか？でも、私なんかが一緒に部屋にいても良いのだろうか？」

「構わないですよ？」

「そうか。じゃあ、お言葉に甘えてそうさせて貰うぞ」

こうして、ツンデレになったマリアは、ハヤタの家に、彼と同居

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

を
する
事
に
な
っ
た。

Episode 4

三千院家の屋敷、ナギの部屋にあるベッドには、ナギが横になって眠っていた。

その傍らで、ハヤテがナギの様子を見てみると、ナギが目を覚ました。

「此処は何処だ？」

ナギがそう聞くと、ハヤテが答えた。

「お嬢様のお部屋ですよ」

「そうか……。そう言えば、何だか頭がズキズキする。あの後、マリアが紫色の禍々しいオーラ放った後、私の身に何があったのだ？」

「それはですね、マリアさんがお嬢様の、マリアにツンデレは無理だ、と言う発言にぶちギレて、お嬢様の頭に拳を思いっ切り落として気絶させたんですよ」

「で、その肝心なマリアは何処にいるのだ？」

「それが、外の空気吸って来ると言って出て行きました。しかも、こんなに残して行きましたよ」

ハヤテはそう言って、懐から辞表と書かれた封筒を取り出した。

「じ、辞表だと！？ハヤテ、今直ぐマリアを捜して連れ戻して来てくれ！」

「はい、お嬢様！」

ハヤテは急いでマリアを捜しに言った。

(マリアの奴、急に辞めるなんてどう言う事だ?)

「それはナギお嬢様に嫌気が差したからである」

すると、ナギは天に向かって睨み付けた。大方、天の声でも聞こえたのだろう。

三千院家のお屋敷から数メートル程離れた所にあるオンボロアパートの疾風荘。此処の2F、205号室に、ハヤタとマリアはいた。「此処がハヤタの家か。屋敷とは全然違うんだな」

「マリアさん、それは自慢ですか？」

「否、屋敷と違って庶民の住む部屋がとても狭いのに驚いているだけだ」

「確かにあの屋敷は凄かったですね、最初見た時は皇居かと思いましたが」

グウー　マリアの腹の虫が鳴いた。

「お、お腹空いたな、何か食べさせてくれないか？」

「うーん、それじゃあ、何処か食べに行きましようか？」

この時、マリアはこんな妄想をした。

あるレストランでハヤタと二人つきり。そしてハヤタからの愛の告白、及びプロポーズ。

マリアは自然と頬が赤くなった。

「マリアさん、顔赤いですよ」

ビクッ！　マリアは驚いて体が反応した。

「き、気のせいだ！」

「そうか？じゃあ行こうか」

ハヤタはそう言っつて、玄関の前に行っつてドアを開けた。

「あ、ハヤテ・・・」

「やあ、朝月くん」

「こんな時間に何の用だい？」

「うん、ちょっと人を捜しててね。つり目でツインテールの子なんだけど・・・」

「それって、ひょっとしてあの子？」

ハヤタは部屋の隅で小さくなっているマリアを示した。

「マリアさん、どうしてこんな所に!？」

ハヤタがそう言っつて、中に入ろうとすると、ハヤタがそれを制止した。

「ハヤテ、マリアさんの事知ってるみたいだが、どう言う関係だい？」

「どう言うって、ただの仕事仲間だよ」
するとマリアは、

「どうせ私の事迎えに来たんでしょ？私帰らないから！」

「マリアさん、そんな事言わないで、お嬢様が心配してますよ」

「あんな奴知らない！」

その時、ハヤテの顔を黒い影が覆い被さった。

(奴・・・今お嬢様の事を奴って・・・)

「兎に角、早く帰って！」

「解りました。では、気が向いたら、帰って来て下さい」

ハヤテはそう言うって、去って行った。

「行った？」

マリアはハヤタに顔を向けて訊ねた。

「行きましたよ」

そう言いながら、ハヤタはマリアの下にやって来た。

「マリアさん、帰らないで良いんですか？」

「良いのよ、あんな所」

(この人・・・意外と強情っ張り？)

「それより、ハヤテとはどう言う関係？」

「えっ、どう言うって、潮見高校の元クラスメイト」

マリアは目を点にした。

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

E p i s o d e 4 (後書き)

さて、
西沢さん^{ハムスター}出しますかね。

Episode 5

お屋敷に戻ったハヤテは、ナギの部屋に入った。

「おお、戻ったかハヤテ。して、マリアは見付かったか？」

「ええ、一応見付かったのですが、帰りたくないとだだをこねられてしまつて……」

「そうか、しょうがない奴だな、マリアも。それよりハヤテ、お腹が減ったぞ」

「うーん……。そうだ、マリアさんもない事だし、二人で何か食べに行きましょうか？」

ナギはそれを聞いて喜んだ。

その頃、ハヤタとマリアはレストランに来ていた。

「マリアさん、何食べます？」

「そうね、私はこの高級ステーキにでもしようかしら」

と、マリアはメニューに載っている見るからに高そうなステーキを指差した。

「それ高くない？」

「良いのだこれで！」

「はいはい」

その時、後ろで声がした。

「朝月くん……だよね？」

振り向くと、そこにはウエイトレス姿の西沢にしざわ 歩がいた。

「あれ、西沢さん、何で此処に？」

「見て解らない？バイトだよ。所で、その娘は？」

「マリアだ」

「そうなんだ。しかも三千院家のメイドさんと同じ名前だね」

「だって、この人その三千院家の元メイドさんですから」

「はあ！？」

歩は頭に疑問符を浮かべた。

「何でも、ツンデレを目指す為、仕事を辞めたんだとか」
「ツンデレを目指す為？」

何で目指してるの？ とでも言いたげな顔を歩はした。

「それはな、マリアに好きな人が出来たからに決まっているだろ」
と、突然と隣のテールブルから声が聞こえてきた。

ハヤタ、マリア、歩の三人は一斉にその方向を向いた。

「ナギにハヤテ、何故お前達が此処におるのだ！？」
そう言うのはマリアだった。

「おいマリア、普通に話したらどうだ？お前のツンデレ振りは見てるだけで疲れる」

その瞬間、二人の目から黄色の細い一本の線が飛び出し、バチバチと火花を散らした。そして、ナギの背後にドラゴンールの神シエンの様なドラゴンが現れ、マリアの背後にその写し身が出現した。

「強そうなドラゴンだな、マリア」

「そりゃまあ、お前の写し身だからな」

マリアがそう言うのと、二人のドラゴンは激突。両者は一步も譲らず、互角の戦いを見せ付ける。

すると、ハヤタがナギに言った。

「おい餓鬼、ドラゴンをしまえ、レストランが破壊される」

なっ！？ ナギは固まり、同時に二匹のドラゴンが消滅した。

「ハヤテー！」

ナギはハヤテの胸に飛び込んで泣き出した。

「あいつに餓鬼と言われた、私は餓鬼か！？」

ナギはそう言って、ハヤタを指差した。

（まあ、あのナギを口一つで凹へこますとは、ハヤタさんってある意味恐ろしいですわ）

と言うのは、マリアの心の感想である。

「僕達から見れば充分餓鬼ですが何か？」

ぶちっ！ ナギは切れた。

「ハヤテ、あいつの口を封じろ！」

「と言われましても、僕では彼には勝てませんよ」

「何だと！？車に轢かれ様が屋上から飛び下りても死なない上、虎と戦闘たたかって互角、ロボットと戦闘して勝つお前があんな奴に勝てないと言うのか！？」

「ええ、だつて彼は超サ ヤ人ですから」

「何、それは本当か！？否、それ以前にサ ヤ人は存在するのか！？アニメだけの宇宙人じゃなかったのか！？」

「伊豆にマヤとか言う宇宙人がいたくらいだからサ ヤ人が実在してもおかしくは無いと思いますよ、お嬢様」

「確かに有り得るかも。しかし、こいつがサ ヤ人だと言う証拠はあるのか、ハヤテ？」

「と言いますと？」

「例えば、満月を見ると大猿になるとか、金髪になれるとか色々あるだろ？」

「金髪にならなつた事あるぞ」

マリアが言った。

「あと、満月を見ると変身するよ」

今は歩だ。

「よし、そこまで言うなら見せて貰おうか。今日は丁度、満月だしな」

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

Episode 5 (後書き)

うっ、マリア主役なのに話しがそれ始めた！

Episode 6

「よし、そこまで言うなら見せて貰おうか。今日は丁度、満月だしな」

ナギはそう言って、全員連れて外に出た。

「お前、満月を見る」

ナギに言われ、ハヤタは夜空を見上げた。しかし、月は雲に隠れていて見えなかった。

「満月なんか出て無いよ？」

そう言って、人を疑う様な目でナギを見つめるハヤタ。

(まずいな・・・また何か言われるかも。何か言い訳を考えねば!)
と、ナギが言い訳を考えていると、ハヤタが唐突に言った。

「所で、さつきから金髪とか変身とか、良く解らないのですが？」

えーっ!? ハヤテ、ナギ、マリア、歩は驚いた。

「さつきの公園での事覚えてないのか？」

マリアの問いに、ハヤタは首を振った。勿論、横にだ。

「僕、金髪にまりました？」

その時、マリアの顔に黒い影が出来た。

(えっと、これは何と申したら良いのかしら?)

「そう言えば、ハヤテ君がまだ潮見にいる時も同じ様な事あったよね」

「そうそう、あの時は朝月くん、セー　クーラになっちゃったんだよね」

「せ、セー」

「クーラって、あのアニメのか!？」

ハヤテと歩は首を縦に振って頷いた。

「でも結局、本人は覚えてなくて」

「えー、僕セー　クーラになっちゃったんですか？」

「満月を見てね」

「ちよっと待て、サヤ人は大猿だろ!？」

ナギは突っ込んだが、ハヤテ、歩の二人は首を横に振った。

「確かに、朝月くんはサ ヤ人だけど、大猿には変身しないですよ。大猿に変身するサ ヤ人は鳥 明のドラゴン ールだけですよ、お嬢様」

その時、織田倉と眼鏡を掛けた男が現れ、

「見付けたぜお嬢ちゃん。さあ、僕たちと行こう！」

と、マリアを捕まえ、連れて行こうとした。

「またお前らか・・・」

ハヤテはそう言って、目にも留まらぬスピードで織田倉を仕留め、気絶させた。

「マリアさん、何なんですかあの人達？」

ハヤテの問いに、マリアは答える。

「元メイド狩りのツンデレ狩りだ」

「朝月くんと互角に戦闘ってますけど、強いんですか？」

「強い、途轍もなく強い。金髪に為るのが見れるぞ、ナギ」

「何、本当か!？」

それを信じたナギは、咄嗟に視線をハヤテに合わせた。

「貴様、一度俺にやられているのにも関わらず性懲りもなくマリアさんに手を出すとはな」

「僕はね、好きな人の為なら絶対に諦めない」

「何を言う?人間諦めが肝心だ!」

ハヤテはそう言って、男を蹴り上げた。

「うおー!」

男は悲鳴を上げて空高く飛んで行った。

キラーン! 男は星の如く輝いて消滅した。

「おいマリア、金髪にならないでは無いか」

ナギはそう言って、マリアを睨んだ。

(おかしいですわね・・・)

「もう良い。ハヤテ、帰るぞ!」

ナギはそう言って、去って行った。

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

「えっ、あ、お嬢様、お食事の方は？」
と、ナギを追うハヤテ。

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

Episode 6 (後書き)

自分でも何を書いているのか解らない。

Episode 7

とある河原。ハヤタはピンク色の長い髪の乙女と向かい合っていた。

「桂 ヒナギク、俺を呼び出すとは、一体なんの用だ？」

「私と、勝負して」

ヒナギクはそう言っつて、竹刀を一本投げ渡した。大方、剣道でもやるつと言っつのだらう。

ガシッ！ ハヤタは飛んで来た竹刀を掴み、

「何故こうなる？」

「決まってるでしょ？大会で負けた時のリベンジよ」

「大会？ヒナギク、お前まだ根に持っつたのか」

「うるさいわね！兎に角、早く面付けなさいよ！」

「嫌だ」

と、余裕振りを見せるハヤタ。

「俺は負けねえ。だから付けねえ」

「あら、随分となめてくれるのね。良い？あの時の私とは、ひと味違っつわよ」

ハヤタは鼻を鳴らし、

「なら見せて貰おうか」

ハヤタはそう言っつて、掌を上に向けて来いと挑発する。

ヒナギクはゆっくりと間合いを詰め、竹刀を持つ手を動かした。

カンッ！ ヒナギクの竹刀がハヤタのそれに弾かれた。

「・・・面」

ハヤタはヒナギクの顔の前で竹刀を止めた。

「ひと味違っつんじゃないか？」

そう訊ねるハヤタに、ヒナギクは驚いた顔で答える。

「今の一体どうやっつて？」

「それは教えられないな」

「ケチ、教えてくれたって良いじゃない」

その時、何者かの指がヒナギクの口を広げた。

「ハヤタをケチ呼ばわりするのはその口か？」

「いたたたた、誰よこんな事するの!？」

ヒナギクは無理矢理指を抜き、後ろを見た。その先にはつり目でツインテールのマリアがいた。

「あ、マリアさん。何しに来たんですか？」

「あなたを捜しに来たのよ。それより、あなたヒナギクと知り合いだったのか？」

「そう言うマリアさんこそ、ヒナギクと知り合いなんですか？」

「ヒナギクは白皇の後輩だ」

「ちよつと待つて。私こんな人知らないわよ」
すると、そこへナギが現れ、

「こいつはウチでメイドをやっていたマリアだ。どうやら、この男に惚れ込んでツンデレになったらしい」

ヒナギクは、驚いて飛び上がり、

「うわっ、ナギ!？あなた何処から湧いて来たの!？」

「人を虫みたいに言うなボケ」

「べ、別にそう言う意味で言ったんじゃない・・・」

「じゃあどう言う意味だ!？」

と、ヒナギクを睨むナギ。

「何よ？」

ヒナギクは睨み返した。

「マリアさん、僕を捜してたって、何か用ですか？」

「そうだった。ハヤタ、お前に言いたい事があったんだ」

「言いたい事？」

ハヤタは頭に疑問符を浮かべた。

「此処じゃあれだからちよつて来てくれ！」

マリアはそう言うて、ハヤタの手を掴んで走り出した。

「ちよつ、何処へ行こうってんだ!？」

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

「良いから良いから」

そして辿り着いたのは、とある映画館。

「私、あれが観たい」

マリアはそう言っ、看板を指差した。その看板には、今流行りの恋愛アクション映画、世界の中心で哀を叫ぶのポスターが貼ってあった。

「観れば良いじゃないですか。僕は観る気無いし、一人で観れば？」

「私はハヤタと一緒に観たいのだ」

「まあ、暇だから良いけど・・・」

こうして、二人は映画を観る事になった。

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

何だこの話じゃー!?

Episode 7 (後書き)

Episode 8

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

観終わった二人は、映画館から出て来た。

「あー面白かった」

「良かったね」

ハヤタはつまらなさそうに言った。

「むっ、何だその顔は!？」

「実は僕、放映開始日に観てるんです。だから結末知ってて、観る気が無かった」

「ガーンッ！ マリアはショックを受けた。」

（駄目よ私！ハヤタさんを楽しませなくては!）

「そうだったのか。無駄な時間を過ごさせてすまなかったな」

「別に良いよ。暇だったし」

「否、駄目だ。よし、今日一日、私が楽しませてやろう」

マリアはそう言うと、ハヤタの腕を掴み、駆け出した。そして着いた先は、とある遊園地。

「この遊園地のお化け屋敷、とても怖いそうだ。入って見ないか？」

マリアはそう言いながら、ある妄想をした。それは、お化け屋敷で怖がってハヤタに抱きつく事である。

ハヤタは悩んだ末、

「うーん、解った」

と、チケット売り場に並んだ。

「ちょっと待てハヤタ、チケットなら私が二枚持つてるぞ」

マリアはそう言ってチケットを二枚出した。

「マリアさん、何で持つてるんですか？」

「何と無くだ」

「何と無くって・・・」

「さ、入るぞ」

マリアはハヤタの腕を掴み、入り口に向かった。

入り口を抜けると、そこは三千院家より大きい敷地が左右前方に広がっており、土産屋や色んな乗り物が所狭しと設置してある。

「こっちだ」

と、マリアはハヤタの腕を引っ張る。

「ちよっ、痛いって」

「あ、ごめん・・・」

マリアは止まり、ハヤタの腕を放した。

「マリアさん、今日ちよつと変ですよ？何か企んでる？」

ギクツ！ マリアは焦った。

（駄目よ悟られちゃ）

「そ、そんな事無いぞ。私はただ、ハヤタと一緒に遊びたいだけなのだ」

「要するに、デートですか」

その言葉にマリアはカアツと赤くなった。

「違っつ、そんなんじゃないぞ！」

「自爆した元メイドのマリア」

マリアは天に向かって睨んだ。大方、天の声でも聞こえたのだらう。

「あの、マリアさん？そんな恐ろしい形相ウキウキで上向いてどうかしたんですか？」

その問いにマリアは慌てて顔を元に戻し、

「私、恐ろしい顔だったか？」

と、訊ねた。

「それはもう、とても恐ろしかったですよ。それはそうと、お化け屋敷入るんですよね？」

ハヤタはそう言って、廃墟の様な建物を指差した。

マリアはハヤタの指が差し示す先を見た。

「おお、これだ！ハヤタ、早速入るぞ」

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

マリアはそう言って、ハヤタの腕を掴んでその建物へと入って行った。

そして暫くすると、ハヤタの悲鳴が聞こえた。中では、ハヤタがマリアにしがみついて震えていた。

(ハヤタさんって、お化け嫌いなのかしら?)

「よしよし、私が付いているぞハヤタ」

Episode 9

夜中、ハヤタはヒナギクの自宅に来ていた。と言うのも、彼女に呼ばれたからだ。

「で、何で僕を呼んだの？何か訳があるんでしょう？」

その問いにヒナギクは真剣な眼差しでハヤタを見つめる。

「なっ、何かな？」

ハヤタは少し焦り、冷や汗を垂らした。

「いや、こっやって間近で見るとハヤテ君より格好良くなって」

「……」

ハヤタは沈黙した。

「冗談よ。本気にした？」

（何を言ってるんだこの人は？）

「所で、そろそろ本題に入りませんか？僕に用が有って呼んだんでしょ？」

「うん、まあ、一寸相談したい事があって」

「相談したい事？」

「うん。実はハヤテ君の事なんだけど、最近ナギがべったりで近付けないのよ。そこで、あなたに頼みがあるんだけど、ナギを暫くの間ハヤテ君に近付かない様にして欲しいの。出来るかな？」

「ナギって、あのクソ生意気なチビですよね？まあ、出来ない事は無いけど……」

この時、ヒナギクは思った。

（マリアさんは生意気じゃないのかしら？）

「で、決行は何時？やるからには本格的にやらないと」
ハヤタは燃えている。

（この人、ナギに何か恨みがあるのかしら？）

翌朝、ハヤタはSPの嚴重な警備を掻い潜り、三千院家の屋敷内へ不法侵入した。

（さて、チビは何処だ？）

と、辺りを見回していると、シマウマ模様の虎、タマが何処からか現れた。

（なっ、何で屋敷内に虎が！？）

目を疑ったハヤタが驚いていると、タマが凄いい形相で睨み付けて来た。

「虎の分際で睨み付けてんじねえぞコノヤロー！」

ハヤタは睨み返した。が、気に触れたのが、タマがいきなり襲い掛かって来た。

「誰だか知らないがム力付く野郎だな。食い殺してやる」

「虎が喋んな！」

ハヤタは懐からハリセンを出し、正面から襲い来るタマをバシッと叩き付けた。

刹那、タマは後ろへ吹っ飛んだ。

「いってえな、何すんだボケエ！」

タマは涙目で怒鳴った。

「虎が喋るな」

「そんなのオレの勝手だろ！？」

「・・・もう良い、好きにしてくれ」

ハヤタは呆れ顔で言った。

「所で、ナギとか言うあのクソ生意気な餓鬼は何処にいる？」

「んっ、貴様、今お嬢を貶したな？」

タマは目をキラッと光らせ、ハヤタに襲い掛かった。

しかし、ハヤタはヒラリとかわす。

「虎如きが俺に敵うと思うな」

ハヤタは飛び上がり、直下型キックをタマにお見舞いした。

ドッ！ タマの頭にハヤタの足がめりこむ。

「ナギの下へ案内して貰おうか」

「イ・・・イエツサー・・・」

こうしてタマは、ハヤタを乗せてナギの部屋の前まで向かった。

「で、お嬢には何の用なんだ？SPを掻い潜って侵入するくらいだから、何か訳があるんだろう？」

「ナギを誘拐する。出来ればこの事は隠密に済ませたい」

「キーッ！　タマは急に立ち止まった。

「何故止まる」

「そりゃ止まりたくもなるわい！お嬢を誘拐するだど！？何か考えてんだ！？」

「本当ならこんな事はしたくない・・・。だが、そうせざるを得ないんだ」

「殺す、テメエ食い殺す！」

タマは立ち上がり、ハヤタを廊下に落とす。

「そうか、邪魔をしようのだな？」

「当然だろ」

そう言っただけで、ハヤタに襲い掛かった。

「鈍足」

ハヤタはそう呟くと、目にも留まらぬ速度でかわし、タマの背後に回り込んだ。

「悪いが、お前には暫くの間俺のシモベとして働いて貰う」

ハヤタは懐からどす黒いオーラを放った禍々しい首輪を取り出し、タマの首に巻き付けた。

「くっ、体が！貴様、何をした！？」

「呪いの首輪だ。それを填めた以上、俺に逆らう事は絶対に出来ん。

所でお前、俺をナギの下へ運ぶ途中だったよな？」

「御案内します。お乗り下さい」

タマはそう言っただけで、ハヤタを背中に乗せた。

(クソッ、この首輪のせいで逆らえん・・・)

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

Episode 9 (後書き)

マリア主演なのにもマリア一回も出てない……。

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

ハヤタを乗せたタマは、ナギお嬢様の部屋の前までやって来た。

「タマ、ご苦労だった」

ハヤタはそう言つて、首輪を外してタマの背中から降りた。

「ふっ、これで俺は自由だな」

タマはニヤリと笑うと、ハヤタに飛び掛かった。が、ハヤタはヒラリと身をかわし、回し蹴りを放った。

タマはヒューンツと飛んで行き、一番端の壁にドカツとめり込んだ。

「顔洗つて一昨日来やがれ」

ハヤタはそう呟くと、ナギお嬢様の部屋の扉を開けた。

「誰だ！？」

と、振り向くナギお嬢様。

ハヤタは目にも留まらぬ速度でナギお嬢様の後ろに回り込み、

「少し眠つて下さい」

そう言つてクロロフォルムを染み込ませたハンカチを取り出し、ナギお嬢様に嗅がせた。

「うっ」

ナギお嬢様は、呻き声を上げると、意識を失った。

「任務なんだ、ごめんな」

ハヤタはそう言つて、ハンカチをしまい、代わりにガムテープを出し、ナギお嬢様の口を塞いだ。そして、身ぐるみを剥がし、ロープを巻き付け、タンスの中に閉じ込めた。

コンコン 突如、扉を叩く音が聞こえ、

「お嬢様、入りますよ」

と、ハヤテの声が聞こえた。

（やべっ、今入られたらまずい事になる！）

ハヤタはナギお嬢様の声で、

「お、ハヤテか。ちょっと待ってくれ」と、言った。

(早く変装しなきゃ)

ハヤタは猛スピードで身ぐるみを脱ぎ、ナギお嬢様に変装し、彼女の着ていた服を着用した。

「良いぞハヤテ」

ナギハヤタがそう言うと、ハヤテが部屋に入ってきた。

「で、何の用だハヤテ？」

「何の用だ、って、お嬢様が呼んだんじゃないですか」

「お、おう、そうだったな。それじゃあハヤテ、一寸お使いを頼ましてくれ」

「お使い、ですか？」

「ああ、今からヒナギクの所へ行ってきたくれ」

「ヒナギクさんの所にですか？」

「そうだ。何でも、ヒナギクがお前に会いたがってるそうだ」

「解りました。では、大至急ヒナギクさんの所に行ってきます」

ハヤテはそう言って、部屋を跡にした。

「作戦成功！」

ナギハヤタはガッツポーズをした。

「何が『作戦成功！』なんだ？」

突然、後ろからナギお嬢様の声が聞こえた。

ナギハヤタが振り向くと、その先には、まっば(真っ裸の事)のナギお嬢様が立っていた。

「なっ、お前どうやって抜け出した!？」

ナギハヤタは、慌ててタンスを開けた。中には、口にガムテープを貼られ、ロープで縛られたナギお嬢様が眠っていた。

ナギハヤタは、

「特に異常は無いみたいだな」

と、タンスの扉を閉めた。

「って、異常大ありじゃねえか!つつかおめえ誰だよ!？」

ナギハヤタは振り向き様にそう言った。

「誰って、私は真正銘三千院 ナギだ」

「ちよつと待て！タンスの中の奴がナギでお前もナギだと言うのか！？そんな事有り得ん！」

「否、何故だか知らんが、下田へ行ってから二人になってしまったのだ（詳しくは市販の小説版参照）」

「信じられっかつ、てめえは偽物だ！」

「お前が言うな偽物。それより服を返せ」

ナギお嬢様はそう言って、頬を赤くした。

「めんどいから嫌だ」

ナギハヤタはそう言って、部屋を出て行った。

「こら待て！」

しかし、ナギハヤタには聞こえていない。

（仕方ない、代わりの服を着るか）

ナギお嬢様はタンスを開け、もう一人の自分を起こさない様、慎重に服を出して着た。

一方、タマは未だに壁に埋まっていた。

「助けてやろうか？」

ナギハヤタはタマに聞いた。

タマは、助けて、と言う表情で頷いた。

「やっぱやめた」

ナギハヤタはそう言って、ナギお嬢様の部屋に戻った。

（お、お嬢に見捨てられた・・・）
涙を流すタマ。

「おい、主役の私が一度も出ておらぬでは無いか！これは一体どう言う事だ！？」

マリアはそう言って、空き地の土管を思いつ切り殴った。

バキッ！ 土管に輝が入る。

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

毎度お馴染、ナギお嬢様の部屋では、ナギハヤタとナギのドッペルゲンガーがお話しをしていた。

「成る程な。それでお前はあいつに変装してハヤテをヒナギクの下へ送ったのだな？」

「そう言う事だ。それにしてもあの白虎は何だ？あれ、人間語話すぞ？」

「タマが人語を話す？」

この時、ナギハヤタは思った。

(こいつ、タマが喋る事を知らぬのか?)

「否、今のは冗談だ。それより奴はどうしてるかな？」

ナギハヤタは独り言を言うかのように、洋服ダンスを開けた。

い・な・い　なんと、ナギが消えていた。その代わりと言っちゃ難だが、執事長のクラウスがいた。

「クラウスッ、お前何時からそこに!？」

と、偽ナギ。

「おや、お嬢様が二人・・・？」

クラウスは眼鏡を外し、目を擦って掛けた。

「むむっ、目の問題では無い!」

バタン！　ナギハヤタは扉を閉めた。

「何だ、あのクソじじい？」

「執事長のクラウスだ。何時も何処からか現れる。きっと抜け道があるんだろっな」

「抜け道ねえ。それより本物は何処へ？」

「本物なら此処におるだろうが!」

偽ナギは怒鳴ってそっぽ向いた。

「否、お前はチビの分身であり偽物だ」

「チビ言うな!」

その時、部屋のドアが開いてナギが入って来た。

「クラウスのお陰で助かったぞ。て言うかお前っ、何者だ!？」

と、ナギハヤタを睨むナギ。

「あ、僕ハヤタ」

と、変装を解くハヤタ。

「貴様はあの時の!それに偽物まで!」

「偽物はお前だろ!」

と、偽ナギ。

「お前、ハヤタとか言ったな。あいつを消してくれないか？」

「依頼ですか分身さん？」

「何でも良いから早くやれ!」

「良いだろう。この間面白い玩具手に入れたんでね。こいつで実験してみよう」

ハヤタは懐から端が赤、もう片方が青の色をしたロープを取り出した。

「チビ、赤い方を持って!」

と、赤色の端を投げるハヤタ。ナギは疑いもせず取った。

「これで綱引きでもするつもりか?馬鹿馬鹿しい・・・!？」

刹那、ナギとハヤタの精神が入れ替わった。

「な、何が起こったのだ？」

と、疑問符を浮かべるハヤタ。

「お、どうやら成功の様だな」

と、ロープを回収するナギ。

「悪いが貴様の体は頂いた!今日からこの俺がナギだ!」

「何!？」

ハヤタはナギの方を向いた。

「貴様、一体何をしたのだ？」

「何って、肉体を取り替えたのさ。俺さ、一度でも良いから女の子になりたかったんだよね。で、手頃なのがいたから取り替えさせて貰った」

「返せ！」

ハヤタは飛び掛かった。が、不思議な力に因って弾き飛ばされてしまった。

「無駄無駄、今のお前では近付けまい」

「くっ……」

「おい、お前」

「わっ、私か？」

と、偽ナギ。

「そいつを監禁しとけ」

ナギはそう言ったただのロープを投げた。

「な、何だか知らんが解った」

偽ナギは受け取ったロープでハヤタを縛り付けた。

「所で先刻のロープは一体？」

「入れ換えロープだ。ドラ もんに借りた」

「何、ド えもんだと!？」

「伏せる場所違うぞ！」

と、そこへ、ハヤテがやって来た。

「ただいま戻りましたお嬢様……？」

ハヤテはナギが二人いるのを確認すると、

「ああ！」

と、叫んだ。

「お、お嬢様が二人！」

(少しからかってやるか)

「帰って来て早々何を訳解らん事言っておるのだ？私達は双子じゃないか。だよな、ユウ」

と、偽ナギに振るナギ。だがそれだけじゃ伝わらないと思ったか、アイコンタクトをした。

『俺に合わせる。そしたら本物の体はくれてやる』

『何、それは本当だろうか？』

『ああ』

「そつだぞハヤテ。私達は双子だ」

途端、ハヤタの顔に影が覆い被さった。

(ああ、これは夢だ。夢に違いない)

「おいっ、早く助ける！」

そつ言つたのは身動きの取れないハヤタだった。

「あ、朝月くん？」

「ハヤテの知り合いか？」

「ええ、潮見に通つてた時のクラスメイトです。それより何故そんな格好を？」

「こやつ、私の服を脱がしたのだ」

「まっ、まさかお嬢様、朝月くんと！？」

「ばっ、バカ者。する筈が無いだろ！それにまだ、13だ！兎に角、そつ言う訳だから、拷問していたのだ」

「ごっ、誤解だ、つて言うか私がナギだ！こいつに体を取られたのだ！」

と、ハヤタは目を潤しながら言う。

「それよりハヤテ、ヒナギクとはどうだったのだ？」

「ヒナギクさんですか？明日、デートをする約束をしました」

「何！？」

と、ハヤタ。

「(お前をハヤテには近付けさせないからな)」

ナギは小声でそう言った。

「そうか、良かったなハヤテ。明日の為に今日は早く寝ておけ」

ナギはそう言つてハヤテを部屋から追い出した。

「さて、約束だからな。お前にコレはくれてやる」

ナギはそう言つて例のロープを出し、偽ナギと入れ替わった。

「これでお前は本物だ」

偽ナギはそう言い残し、ハヤタを抱えて窓から飛び下りた。

「・・・・・・・・」

Episode 12・最終話

「なっ、何をするのだ貴様!？」

ハヤタの自宅にて彼に縛られた偽ナギは、ハヤタを睨み付けた。

「何って、お前を俺の物にするのさ。 MARIAさんじゃツンデレ度が足りないからな」

「ロリコンか、お前は?」

ハヤタは懐から例の禍々しい首輪を出した。

「これをすればお前は俺の思い通りに為る」

そう言っつて偽ナギの首に巻くハヤタ。すると、禍々しいオーラが偽ナギの体に侵入し、瞳を真っ黒に染める。

「ナギ、お前が生涯愛している人は誰だ?」

偽ナギは頬を赤く染め、

「そ、それは、は、はは、ハヤタに決まってるだろ」

(な、何を言っつてるんだ私は?この首輪の所為で私は操られているのか?)

「俺の事、好きか?」

「ああ、好きだ。大好きだ」

(私は、お前など・・・)

「成功だ」

ハヤタはそう呟き、縄を解いた。すると、

「ただいま」

と、MARIYAが帰って来た。

「一寸ハヤタ?何でナギ此処にいるのよ?」

「連れてきた。安心しろ、向こうには下田の効能で分身した偽物がいる」

「あ、そう。で、何で連れて来たのよ?」

「それはハヤタを愛しているからに決まってるだろ」

（違う、私はお前なんか・・・）

「待て、ナギはハヤテが好きだったんじゃないのか？」

「否、私はハヤテよりハヤタの方が魅力があると気付いたのだ。それに、ハヤテにはヒナギクと言う立派な恋人がおるではないか」

（違う違う！）

「兎に角そう言う訳だから、私も此処に住む」

（この娘、ナギじゃありませんわね・・・。所でこれは何かしら？）

マリアは偽ナギの首輪に触れた。刹那、首輪は外れ、マリアの首に填った。

「キヤー！」

禍々しいオーラに体に乗っ取られ様としてるマリアは悲鳴を挙げた。

「バカッ、何触ってんだ！？」

「マリア！？」

オーラは、マリアに入り込み、意識を完全に支配した。

「マリア、さん？」

ハヤタはマリアの顔を覗いた。

「大好きよハヤタくん！」

マリアは抱きついた。

「一寸待て！ツンデレはどうした？」

「すみません、ツンデレは疲れますのでやめました」

（すげえなこの首輪。マリアさんの本性曝け出してる・・・）

「おいマリア、その首輪を外せ！」

「無駄ですよ、ナギ。今、マリアは完全に眠っている。ですから、

ナギの声は届きません」

偽ナギは沈黙した。

「どうでも良いけど放して？」

「あら、ごめんなさいハヤタくん」

そう言ってマリアはハヤタを解放した。

「こんなのマリアさんじゃない！首輪を外せ！」

「嫌です。この体とても気に入りました。ですから、私がマリアとして生きて行きます」

「外せ！」

ハヤタは首輪に手を掛けた。

「良いんですか？ハヤタくんに移りますよ？」

ハヤタは手を放した。

（クソ、一体どうしたら・・・？）

「頼むっ、マリアを返してくれ！」

偽ナギはマリアに土下座をした。

「あら、ナギが土下座をするのは初めてですわ。でも駄目です。折角自由に操れる体を手に入れたんですもの。そう簡単に手放したりなど出来ませんわ」

（何、自由？と言う事は、今までの肉体は不適合だったのか？）

「どうでも良いですけどハヤタくん、ナギを元の体に戻してあげて下さい」

「じゃああなたも首輪を外せ」

「御断りしますわ」

「そうか。なら俺も断る」

「そうですか。では私があなただの体に乗っ取ってナギ戻しますわ」

マリアはそう言うと、首輪をハヤタの首に移した。

「なっ!?!」

ハヤタの体に禍々しいオーラが侵入した。

「あれ、私どうしたのかしら？」

マリアは意識を取り戻した。

「マリアさん、一寸此处で待ってて下さい」

ハヤタはそう言って偽ナギと共に出て言った。

（ハヤタくん・・・直ぐに戻りますよね？）

「ただいま」

ハヤタが帰宅。

「早かったじゃない。30秒も経って無いわよ」

「ハヤタですから。では、申し訳無いですが、マリアさんの体拝借します」

「えっ？」

ハヤタは首輪をマリアの首に移した。

「キャッ！」

マリアにオーラが侵入した。

「あれ、俺は一体何を？」

「ごめんなさいハヤタクん、体借りて……」

「あっ、そうだった！てめえ、マリアさんを返せ！」

「御断りしますわ」

「首輪目……！」

「ハヤタクん、落ち着いて下さい。もしハヤタクんが私の子を産ませて下さったらこの体はお返ししますわ」

（マリアさんと俺の子ども？）

ハヤタは妄想した。

（良いかも……って、駄目だそんなの！）

ハヤタは首を横に振った。すると、ハヤタの携帯が鳴った。ヒナギクからだ。

（こんな時に電話か）

「はい、もしもし」

「もしもし、私。一寸聞いてよ。ハヤテくんったらデート断ったのよ！？ナギにボロクソ言われたのが理由なんですって！」

「はあ、そうですか」

「ねえ、今からそっち行って良いかしら？」

「良いけど？」

「解った。じゃあ行くわね」

（ヒナギクが来るのか……）

「どなたからですか？」

「ヒナギク」

（ヒナギクか。ヒナギクは確か、御主人様好みのツンデレ）

ピンポーン　チャイムが鳴り、ヒナギクが入って来た。

「ターゲット捕捉！」

マリアは首輪を玄関先のヒナギクに飛ばした。

「ごめんね、こんな夜中に」

「避けるヒナギク！」

「えっ？」

刹那、ヒナギクの首に首輪が填った。

「ヒナギク！？」

ハヤタは叫んだ。

「五月蠅いわね！何よ、急に大声出して？」

「それより・・・」

ヒナギクはそう言っつてハヤタに近付いた。

「あんた好みのツンデレを乗っ取っつてあげたわ」

「何、ヒナギクをか！？」

「勿論、完全にね」

「恐るべし首輪・・・」

「どうでも良いけど胸貸して頂戴」

ヒナギクはそう言っつてハヤタの胸に顔を埋め、思いつ切り泣き出した。

「ハヤテくんのバカ！最低！」

「おい、お前首輪か？それともヒナギクか？」

「ヒナギクよ！」

「あつそ。で、何で泣く？」

「ヒナギクがあんたの胸で泣きたがっつてるからよ！」

「首輪か・・・」

「ねえ、私を抱いてくれない？」

「嫌だ。お前ヒナギクじゃねえもん」

「何言っつてんのよ？あんたの大好きなツンデレのヒナギク様よ、ツンデレの」

「見た目と喋り方がな」

「信じて、くれないんだ？」

「解った解った、信じてやるからヒナギクから離れる」

「嫌よ、私はこれからヒナギクとして生きて行く。べ、別にあんたの為とかじゃないからね」

ヒナギクは頬を赤らめた。

「やめる。ヒナギクを返せ」

「だから嫌って言うてるでしょ？」

ピシッ！　ハヤタはヒナギクの頬を叩いた。

（御主人様・・・）

「てめえの御都合主義で人の体使われちゃ困るんだよ。解ったら出てけ！」

「・・・ごめん」

ヒナギクがそう言うと、首輪が灰と化して崩れ去った。

「あれ、私どうしたのかしら？」

ハヤタはヒナギクを抱擁した。

「ちよっ、いきなり何すんの？」

「悪い、こうさせてくれ」

（ウワーオ）

マリアは小声で言った。

（そうですか。ハヤタくん、ヒナギクさんが御好きなんですよね？となると私は邪魔者？）

マリアは気付かれぬ様静かにあの場所へ帰って行った。

「ヒナギク、俺じゃ駄目か？ハヤテの代わり、俺じゃ駄目か？」

途端、ヒナギクの心臓が高鳴った。

「ご、ごめん！急にそんな事言われても私何て言ったら良いか！」

「ヒナギク！」

ハヤタはヒナギクを抱擁し続けた。何時間も、何時間も。

「ハヤタくん・・・。私、ハヤタくんでも良い」

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

S
e
e

y
o
u

a
g
a
i
n
,

s
o
m
e
w
h
e
r
e
.

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ化計画～

マリア、恋は実らず・・・。

Episode 12・最終話(後書き)

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1857c/>

ハヤテのごとく！～作者の思いつきでマリアをツンデレにするマリアツンデレ

2008年8月29日17時28分発行